令和5年度　学校評価表

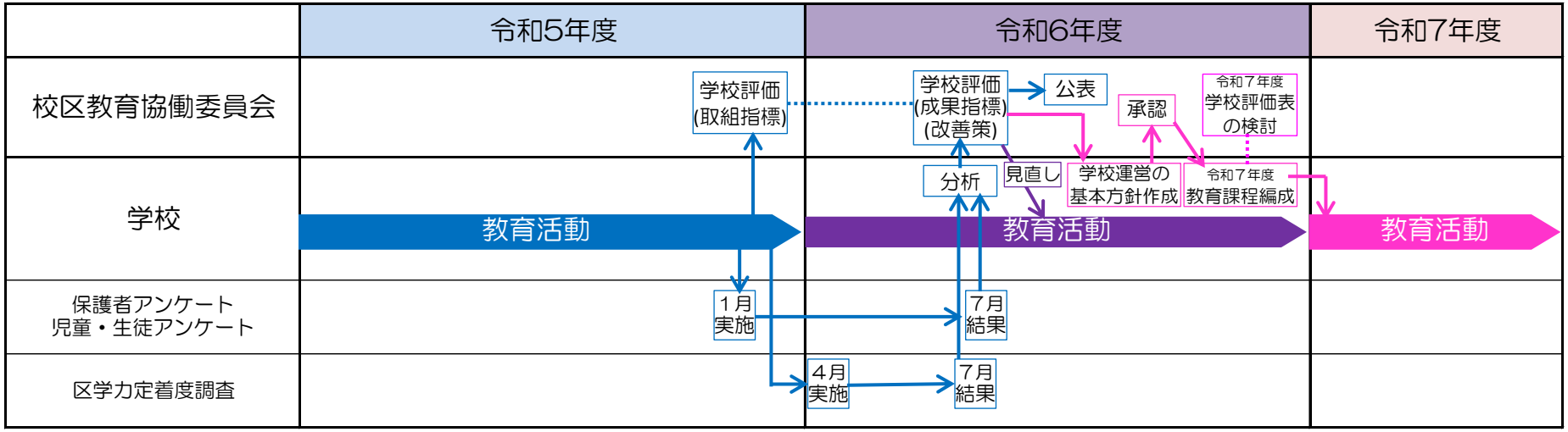
品川区立伊藤学園	校長	野口	大和
伊藤学園校区教育協働委員会	委員長	吉岡	昌紀

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正　令和5年３月２４日 教育長決定 要綱第５号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

(1) 学力に関すること。
(2) 人間性や社会性に関すること。
(3) 体力・健康に関すること。
(4) いじめ防止の取組に関すること。
(5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。
学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和5年度の学校評価が令和6年度および令和7年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



令和５年度　学校評価　品川区立伊藤学園

評価項目１　学力に関すること

重点目標	自らよく考え、選択し、決定できる児童生徒を育てるための基盤となる「基礎・基本の学力の定着」に努める			
評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	品川区学力調査の区内平均正答率を上回る。 80%以上（9学年中7学年以上）	区の平均正答率を上回った教科が、前期課程：41．1%、後期課程：86．6%だった。（4月実施）	B	区学力調査については、前期課程の達成率が低かったが、後期課程の達成率は成果指標を上回った。結果を分析し、明らかになった各教科における課題の解決に向け、引き続き授業改善に務めていく。
	基礎基本の学力の確実な定着を図る、教科担任制を生かした系統的な学習指導を徹底する。	5・6年で算数、国語、社会、理科において、教科担任制を実施した。1～4年は毎日の朝学習で漢字、計算練習を行い基礎基本の定着を図った。	B	
	メディアセンターの本の貸し出しや朝読書を活用し、読書習慣を身に付ける。	朝読書や授業でメディアセンターを活用した他、読書週間の取組も行い、読書習慣が身に付いたと感じる児童生徒が多く見られた。（児童84．1%、生徒74．2%）	B	
②	教員の授業に対する生徒の「よくわかる」評価　授業アンケート90%以上	児童生徒の授業アンケート92．6%だった。ほとんどの教員が達成できた。	A	・児童生徒にとって、よくわかる授業の工夫を継続して行う。 ・「子どもの自律した学びの育成と、教師の支援」を研究主題として、校内研修に取り組む。
	校内研修や校内OJTを活かし、児童生徒の主体的協働的な学習指導を実践する。	前期課程、後期課程合同で教科ごとの分科会を作り、目指す児童像を明らかにして研究に取り組んだ。6月と9月に研究授業を行い、8月にはICT研修会を行った。	B	
	9年間を見通したタブレット端末の活用スキルを系統的に育成する。	授業におけるタブレットの使用状況を毎月調査し、学校全体で共有しながら、活用の幅を広げることができた。	B	
③	児童生徒の一人一人の習熟度に合わせた学習支援の充実　授業アンケート満足度80%以上	児童生徒アンケート90．3%だった。ほとんどの教員が達成することができた。	A	・未来塾をはじめとする学習教室や、ICTを活用しながら、個々の習得のスピードに即した探究型学習を、全学年、全教科で進めていく。 ・校内でOTJを推進し、引き続き、教員の授業力向上を図る。
	未来塾をはじめとする学習教室や補充学習により、基礎・基本の確実な定着を図る。	未来塾では新しい教材も購入し、年間をとおして実施することができた。前期課程は27回、後期課程は13回開催した。サマースクールや夏季集住講座も実施した。	A	
	個々の習得のスピードに即した目標の設定と課題を提示する。	発達段階に応じて、個々の実態に即した課題提示を行った。学年や教科等によって、自由進度の学習も取り入れた。今後更に推進していく。	B	

Ａ＝十分達成できた　Ｂ＝おおむね達成できた　Ｃ＝未達成

令和５年度　学校評価　品川区立伊藤学園

評価項目２　人間性や社会性に関すること

重点目標	社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付け、社会に貢献できる児童生徒の育成に努める			
評価指標	最上段：成果指標 ２段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 ２段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	基本的な生活習慣を身に付けた、自立した児童生徒の育成　学校評価の肯定的評価80%以上	＜児童・生徒＞1～6年生：98%　7～9年生：97% ＜保護者＞87% ＜教職員＞100%	A	児童・生徒、教職員のアンケート結果と比較すると、保護者の評価と差がみられた。学校だよりや保護者会等で、基本的な生活習慣の定着についての取組や成果について発信し、理解を得る。
	礼儀、挨拶、言葉遣いなどを身に付けられるよう、共通理解を図り、徹底して指導する。	年度当初に職員連絡会で共通理解を図るとともに、保護者には保護者会等で協力を依頼して取り組んだ。	A	
	話し合い活動や発表活動を充実させた共感と協働を基盤とした学級・学校運営を推進する。	各教科で話し合い活動や発表活動の機会を設定して授業を行った。	A	
②	学校の一員としての自覚と責任、協調性、貢献力の育成　学校評価の肯定的評価80%以上	＜児童・生徒＞1～6年生：97%　7～9年生：95% ＜保護者＞84% ＜教職員＞97%	A	児童・生徒、教職員おアンケート結果と比較すると、保護者の評価と差がみられた。学校だよりや保護者会等で、学校行事や自治活動における取組や成果について発信し、理解を得る。
	自己の役割と責任、協調性、貢献力の育成を重視した家庭生活、学級・学校運営を推進する。	各学級の係活動、各行事の実行委員、生徒会の「ユニセフ募金」や「愛の光運動」、「エコキャップ活動」、「フォレストサポーター」、「水平リサイクルプロジェクト」を行った。	A	
	リーダーとフォローワーシップの育成による異学年交流を一層推進する。	運動会や学芸発表会ではペア学年の競技・演技を鑑賞し、1～4年生は通年で縦割り班活動、5～7年生はスポーツ大会等を行った。	A	
③	児童生徒の地域貢献意識と態度の育成　学校評価の肯定的評価80%以上	＜児童・生徒＞1～6年生：67%　7～9年生：48% ＜保護者＞79% ＜教職員＞74%	C	地域貢献に結びつく取組を実施したが、意識や態度の十分な向上につながらなかった。今後も継続して取組んでいく。
	大井地区をフィールドとした学習活動を推進する。	1年生は季節探し、2年生はまち探検、3年生は消防署・スーパー見学等を行った。	A	
	地域めぐり、職場体験の拡充と地域行事への参加を促進する。	8年生と6組が職場体験を行い、区民まつりに76名、大井第二地区防災訓練に3名、区内一斉防災訓練に5年生、地域ボランティア清掃に74名が参加した。	A	

Ａ＝十分達成できた　Ｂ＝おおむね達成できた　Ｃ＝未達成

令和５年度　学校評価　品川区立伊藤学園

評価項目３　体力・健康に関すること

重点目標		心身ともに健康な児童生徒の育成に努める		
評価指標	最上段：成果指標 ２段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 ２段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	東京都体力・運動能力調査の全項目で、都の平均点を上回る　50%	ちょうど50%であった。特に握力・長座体前屈は全体的に都平均を下回っている。20mシャトルランは全体的に都平均を上回っている。	B	・特に握力、長座体前屈に関しては能力が低いため、授業のウォーミングアップでの補強的運動で取り組んだり、家庭でもできるエクササイズ等をロイロノートで発信していく。 ・運動が苦手な児童・生徒でも、品川トライアル等でたくさんのチャレンジをして、成功体験をすることによって、運動の習慣化を図っていく。
	授業や学校行事、品川トライアルを通じ、運動の楽しさや喜びを味わう活動を促進する。	教育活動をとおして、達成感を味わうことにより、運動の楽しさや喜びを感じることができた。	B	
	授業やクラブ活動、部活動、地域活動等で主体的な運動の習慣化の定着を図る。	運動の習慣化の定着を図ることができたが、運動が苦手な児童生徒は受動的になってしうことがある。	B	
②	hyper-QU「学級生活満足度郡」が全国平均を上回る　100%	4年から6年の平均が66%（全国43%）。7年から9年の平均が56%（全国41%）。全国平均を上回っている。	A	・全国平均を上回ってはいたが、今後はすべての児童・生徒が「学級生活満足度郡」に入るよう、クラス経営、学年経営、さらには学校経営を充実させ、皆が安心・安全に過ごせる学校づくりを工夫・改善していく。
	児童生徒が自己存在感を実感できる、共感的な人間関係を育成する。	行事や係活動、委員会活動等の活躍できる場をとおして、共に認め合いながら取り組むことができた。	A	
	スクールカウンセラーによる第5、7学年の全員面接で要配慮児童生徒を発見する。	1学期に全員面接を実施。気になる児童生徒は学年に共有できた。	A	
③	安全に対する校内危機管理体制について保護者の肯定的評価　　保護者アンケート90%以上	子どもの安全を守るための取り組みに関して75%の肯定的評価であった。交通安全教室やセーフティー教室、月１回の安全指導が充実していたと考えられる。	B	・安全に関する取り組みに関しては、保護者や地域にも情報発信し、参加できるようにしたり、協力してもらえるようにして取り組んでいく。 ・隔週で行っている情報連絡会はもちろん、関係諸機関とも密に連携していき、校内危機管理体制を強化していく。
	配慮を要する児童生徒へ、迅速な校内情報共有と外部連携機関との多角的な対応を図る。	情報連絡会で共有することができた。児童相談所、子ども家庭支援センター、ハーツ等とも連携し、敏速な対応ができた。	A	
	食物アレルギー対応について毎日確認の実施及び、エピペン研修会を年1回実施する。	毎日、管理職、栄養士、担任のトリプルチェックを行っている。エピペン研修も年度初めに実施した。	A	

Ａ＝十分達成できた　Ｂ＝おおむね達成できた　Ｃ＝未達成

令和５年度　学校評価　品川区立伊藤学園

評価項目４　いじめの防止の取組に関すること

重点目標	いじめをしない、させない、絶対に許さない児童生徒の自己指導能力の育成に務め、いじめの未然防止・早期発見・迅速かつ適切な対応ができる教職員組織づくりを行う			
評価指標	最上段：成果指標 ２段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 ２段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	子供が安心して生活できる学級・学校風土の創出　生活アンケート肯定的評価を90%以上	「学校は楽しい」 5月：89%　10月：90%　1月：89% 「友達と仲良くしている」 5月：96%　10月：95%　1月：93%	A	子どもが安心して生活できる学級や学校づくりができている。次年度も組織的かつ適切に、いじめの未然防止の取組、相談機能の強化等に取り組んでいく。
	hyper-QU等を活用した学級における良好な人間関係づくりと、お互いに支え合い自己信頼感を生み出す自治活動を推進する。	hyper-QU等の結果分析を基にした学級経営、4年生のスクールボランティア活動、5～9年生の委員会活動を行った。	A	
	児童生徒によるSNS伊藤学園ルールの策定と家庭への啓発活動を促進する。	SNS伊藤学園ルールを生徒会が中心となり、全児童・生徒へ周知して、意識を高めた。	A	
②	「いじめをしない、させない、絶対に許さない」意識や態度の育成　学校評価の肯定的評価90%以上	＜児童・生徒＞1～6年生：95%　7～9年生：97% ＜保護者＞76% ＜教職員＞94%	A	児童・生徒、教職員のアンケート結果と比較すると、保護者の評価と差がみられた。学校だよりや保護者会等で、いじめの未然防止、早期発見、迅速かつ適切な対応の取組について発信し、理解を得る。
	人権教育や市民科を通じ、いじめに向かわない態度や能力（自己指導力）を身に付ける。	規範意識、人権尊重の意識の向上、思いやりのある集団作り、多様性の理解に関する内容を市民科の年間指導計画に位置付け、系統的に指導した。	A	
	セーフティ教室等によるインターネットトラブルを生まない情報モラル教育を促進する。	6月に4年、7月・9月に7年生がセーフティ教室を実施した。都度、人権、知的財産権など自他の権利を尊重することなどを指導した。	A	
③	いじめの重大事態発生件数0件	いじめの重大事態発生件数0件	A	いじめはどの学年にもどの学級にも起こることを前提として、早期解決のため学校いじめ対策委員会を中心に組織的に対応するとともに、関係機関と連携しながら対応していく。
	年3回の生活アンケート等によるいじめの気付きと、いじめ対応の共通理解を促進する。	5月、10月、1月に生活アンケートと生活面談を実施し、いじめの早期発見・早期解決に取り組んだ。	A	
	児童生徒に適切な援助希求を促し、それを受け止める学校体制を構築する。	長期休業前の相談機関一覧の配布、月2回の学校情報連絡会での情報共有、関係機関とのケース会議などを行った。	A	

Ａ＝十分達成できた　Ｂ＝おおむね達成できた　Ｃ＝未達成

令和５年度　学校評価　品川区立伊藤学園

公開

評価項目５　（特色ある教育活動に関すること）

重点目標	キャリア教育の視点からの義務教育９年間の学校教育の充実と信頼される学校の実現			
評価指標	最上段：成果指標 ２段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 ２段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	保護者の教育活動の満足度　保護者アンケート80%以上	伊藤学園の教育活動に満足している：74．6% 学校は地域や保護者に積極的に情報発信を行っている：82．2%	B	今年度、児童生徒、保護者、地域の方の意見を取り入れ、時代に沿った教育活動に変えたことに対する評価と考えている。 各行事のアンケートに加え、保護者会や市民科地区公開講座等で保護者の意見に耳を傾け、より良い教育活動ができるよう工夫する。
	児童生徒一人一人の特性の把握と児童生徒・保護者を対象とした相談体制を充実する。	学級担任や学年教員の他、スクールカウンセラーや特別支援教育に係る教員等で連携し、児童生徒・保護者の相談に応じると共に、校内での情報共有を行った。	B	
	学校だよりや学校HPの更新、メールによるお知らせなどの積極的に情報配信する。	学校HPを定期的に更新した。学校から保護者への通知を電子化し、一斉メールや学校HPで情報を速やかに配信した。	B	
②	人と人との関わりによる児童生徒の変容率　学校評価アンケート90%以上	学校は一人一人の子どもたちの良さや可能性を伸ばす教育活動を行っている：61．5%	C	一斉型の授業や活動ではなく、個別最適な学びを多く取り入れ、教育活動の改善に努める。伊藤学園の教育活動を保護者に広く知っていただけるよう、学校HP等でタイムリーに情報発信を行ったり、児童・生徒の姿を直接見ていただける機会を設けたりする。
	各分野の専門性を有する人との関わりや体験から学ぶ教育活動を充実する。	各学年において、ゲストティーチャーを招いた学習を行い、意見交流や体験活動を実施した。コロナ禍が明け、昨年度よりも多く行うことができた。	A	
	大井第一小学校と山中小学校、伊藤学園による一貫プランを推進する。	3つのテーマ「人とのかかわり」「地域とのかかわり」「自分とのかかわり」について、計画的に実施することができた。	B	
③	発達段階に即したキャリア教育指導計画（9年間）の策定と希望進路の実現　生徒アンケート100%	キャリア教育指導計画に基づいて指導を行い、希望進路を100%実現することができた。	A	年度ごとに教職員の入れ替わりがあるため、児童生徒の特性については、次の担任への引継ぎを確実に行うと共に、改めて全教職員で共通理解を図り、個に応じた指導、支援を実現する。
	個々の特性を踏まえた生活指導の充実と発達段階に応じた規範意識を醸成する。	生活指導研修会等で、児童生徒の特性について全教職員で共通理解を図り、指導に当たることができた。	B	
	キャリアパスポート等を活用し、自己の特性や希望に合った進路選択を実現する。	全ての学年でキャリアパスポートを活用した。児童生徒の一人一人が、自分自身の目標を定めると共に、それに向かって努力する姿勢を身につけることができた。	A	

Ａ＝十分達成できた　Ｂ＝おおむね達成できた　Ｃ＝未達成